

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520010

研究課題名(和文)フッサール現象学の内的時間意識に基づく、時間の層から見た笑い反応形態の展開

研究課題名(英文)Development of a Diachronic Model of the Laughter Response through the Application of Husserl's Phenomenology of Internal Time Consciousness

研究代表者

Weeks Mark (Weeks, Mark)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：70514222

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：フッサール現象学を探究することによって、笑いという経験は、意識の流れの継続性に着目した「超越的主体性」と呼ばれる枠組みにおいて理解することの難しさが明らかになった。これにより、笑うという行為を、笑いという現象そのものからユーモアの研究に焦点を移さずに考えることがなぜ困難なのか、説明が可能になった。本研究者は、笑いを対話および感情的要素に関する概念から切り離し、時間経過の意識を狂わせる機能としてとらえることの利点を示した。この新たな笑いの概念は、哲学のみならず、文化、文学、教育の研究にも応用できる。またこの研究は、心理学と社会学の分野でよく扱われる時間概念の研究にもつながりを見出している。

研究成果の概要(英文)：The initial study of Husserl's phenomenology revealed the difficulty of understanding the experience of laughter within the framework of so-called 'transcendental subjectivity', in which emphasis is placed upon the continuity of the flow of consciousness. This enabled the researcher to explain why researchers have had difficulty explaining the experience of laughter without shifting focus from laughter itself to the study of humor. Papers published and presented by the researcher demonstrate the benefits of treating laughter outside of notions of communication or emotional content, by viewing it as a mechanism dislocating the flow of time consciousness. This reconceptualization of laughter may be usefully applied not only to philosophy but also to cultural, literary and education studies. The research has also opened connections to the increased study of time in the fields of psychology and sociology.

研究分野：哲学

キーワード：Laughter Time Consciousness Subjectivity Humor

1. 研究開始当初の背景

笑いは、コミュニケーション、学習、創造的思考を育むことはいまでもなく、ストレスに対抗する重要な機制（メカニズム）、特に、とりわけ、経済文化交流が増大した時期には重要な機制として次第に研究されるようになってきている。現代におけるユーモア研究の中核として、不整合という概念が根本的となっている。これは、特に言語学者ラスキンの研究（“The Semantic Mechanisms of Humor,” 1985）以来、研究者に広く受け入れられている。本研究開始にあたり未解決の問題としてあるのは、不整合は笑いが生じるための本質的な前提と思われるにもかかわらず、概念上の不整合のいくつか（すべてではなくいくつか）の事例において、不整合がなぜどのようにして、笑いの突然それも劇的に起こる心的・生理的効果を生み出すのかは説明されていない。可能性として推測しうる説明は、戯れの様態（モード）を支えるある特定の心理的・環境的条件のもとでは、不整合を捉える感覚が、意識を一時的にだが劇的に転位するということである。その場合、時間を過去・現在・未来へと流れるものとして主観的に経験する日常性が、快楽を伴って攪乱されているのだ。

この仮説は、19世紀にショーペンハウエルが最初に提唱し、近年までほとんど研究上の注意を引かなかった。しかし、20世紀後葉から、笑いの時間的効果については、哲学領域の学者（Kimmel “Notes on an Ontology of the Moment, 1998）がその意義を認めるようになった。ところが、キンメルにしてもウェーバーにしても、笑う以前・最中・以後の心的経験をつかむための、共有しうる明確な概念枠がないために、時間意識における分断を概念化することが困難だと述べている。ユーモア研究で名高い言語学者サルバトーレ・アッタルドによれば、笑いを生み出す時間の機能は、「研究を進めることが非常に必

要」（“Timing in the Performance of Jokes”, *Humor*, 2011）なのだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ジャック・デリダの哲学における「時間性」の観念を用いながら、申請者が提唱する、「時間をベースとした笑いの不整合理論」をさらに深めることである。時間性について、主としてここで焦点をあてるのは、現象学発展の重要人物である20世紀哲学者エドモンド・フッサールによる主観的時間性の業績である。フッサールの『内的時間意識の現象学』およびそれに関連する書籍に依拠しながら、笑うという経験が、笑う当人が抱く時間に対する主観的経験とどう関わるかをめぐって考察する。

笑いにより生じる時間意識の突然の劇的変化という視点から笑いの経験を記述することによって、笑いは新たな観点から効果的に概念化できると思われる。不整合が笑いという反応を現実を引き起こすその様態を説明することは理論上の問題となっているが、その問題を、この新たな概念化により検討することが可能となるであろう。また、この概念化により、ユーモアのあるテキストや状況を、たとえばリズムやいわゆる「宇宙時間」といったことまでも含めた時間構造の観点から、今まで以上に詳細に分析することが可能となる。ここで重要なのは、笑いを時間上の現象としてよりよく理解することにより、心理学、社会学、教育学といった領域において笑いの効果を包括的に捉える一助となることである。詳細な分析が可能となることはもちろん、ユーモアや笑いを心理療法や教育現場に実際に適用することを促進する役にも立ちうるのだ。

3. 研究の方法

本研究は主として哲学の立場からのアプローチをとるが、哲学以外の研究や概念を総

合的に用いて行う。まず、フッサールの著作、とりわけ『内的時間意識の現象学』とこの著作を扱う二次資料を詳細に検討する。あわせてアンリ・ベルグソンの哲学も検討するが、それはフッサールの時間論はベルグソンに依拠しており、しかもベルグソンには笑いについて名著があるからだ。

これと並行して、時間意識という主題に直接・間接に関連するテキスト、すなわち、教育学、文学研究、文化研究までも含んだ、哲学領域外の研究書を含めて、広範囲にわたる文献を渉猟する。また同時に、領域横断的にユーモアと笑いという主題を扱った最新の研究についても目配りをする。つまり、比較的手法を用いた間領域研究とする。時間意識とユーモアや笑いについての主題を扱う種々のテキスト間の類似点を探求し、類似点をつなぎ合わせ一つの領域を考え出し、理論的枠組を構築することとする。

4. 研究成果

本研究により、様々な文脈において笑いという反応は、人間同士の関係も含めて、人間とそれを取り巻く世界との間の関係に意義深い変化をもたらすことが証明できた。本研究では、時間という主観的経験をベースにして、笑いがそうした劇的効果をもたらすかを説明するモデルを提供できた。時間意識に関するフッサールの業績に依拠して、領域横断的にも有効な、笑いの経験のモデル化は不的確だと最終的に判断したとはいえ、フッサールが時間意識の重要性を強調したという点については、本研究者は研究を進める上で有効な参照枠となった。フッサールの業績を研究したことで、研究をフッサールに関連する哲学や文化の動きへと広げることが可能となり、笑いのモデルを文化史という広い領域に位置づけることができた。笑いのモデルの主要な論点とは、次のように整理できる。ある人が、不整合な要素を戯れに導入

されたことに対して笑う場合に経験されるような宇宙的笑いとは、主観的時間を突然分断する印としてみなすことができる。本研究者が唱導するに至った主だった点は以下の通りである。(1) 笑いと言時間との関係を直接・間接に言及した重要な文献史を明示したこと、(2) 笑いにおいて意識の流れが中断が、当該の人の時間意識を別な方向に促し、自己が歴史と連続しているという前提に亀裂を入れること、(3) 欧米文化の外側からの視点は笑いと言ユーモアという主題についての重要で新たな視点を提供しうること。

本研究者は *International Society for Humor Studies* (2012年6月開催, クラコフ [ポーランド])において、笑いと言ユーモアに関する時間という主題を探求する特別セッションの司会を勤め、またそのセッションにおいて“On Perceptions of a Subjective Time Slip in Laughter”というタイトルで口頭発表も行った。発表において、笑いと言ユーモアの学際的な研究において、時間という主題をさらに深める必要性を説いた。これが契機となり、学術誌 *Israeli Journal of Humor Studies* の編集者から招待寄稿を依頼され、口頭発表に基づいた論文が掲載された。2013年のこの論文では、笑う人の時間経験が、近代の哲学、文化研究、社会学、教育学、文学などの多種多様なテキストにおいて、直接的に言及され、また間接的に暗示されていることを、国内外の読者向けに指摘した。そこで扱ったテキストは、ドイツ哲学者フリードリッヒ・ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』の笑いの表明から、フェミニスト・文化研究者アンカ・パルヴァエスク(2010)、さらには、井上宏教授のような近年のアジアからの重要な学術的貢献にまで及んだ。論文では、(おそらく最初の指摘となるが)アジアの学者においては、笑いの内的経験を(西欧心理学で通常想定されているように)ある感情の表出としてではなく、精神的排出とし

て記述するという類似点があることを明らかにした。また論文では、アジアの学者の中には、笑いの時間的効果について明示的に言及しているのはただ一人だけだが、精神的排出には時間の断絶が内包されていることを説いた。この論文に続いて、本研究者は同学術誌の編集者から、将来出版予定の、時間と笑い・ユーモアの関係についての特別号の編者となるように要請された。

三年に渡る本研究において、本研究者は「時間をベースとした笑いの不整合理論」が有効であることを証明すべく、様々な分野に理論を応用してきた。その成果の一環が国際言語文化研究科紀要に掲載した論文で、ここでは日本の喜劇映画にみられるある種のユーモア（「禅ユーモア」と呼ぶ西洋批評家ものいる）は、主人公の笑いにより観客の時間意識に断絶をもたらし、観客が同時代の都会文化の中で失ってしまった自然の生活のリズムを観客に触れさせる役割を果たしていることを論じた。

2013年から本研究者は、笑いにおける主観的な時間の断絶という観念は20世紀哲学者ジル・ドゥルーズが提示した「ノマド的思考」という観念と結びつきうると説明してきた。「ノマド的思考」という概念はニーチェの笑いとは直接につながり、しかも時間を絶えず分断し更新するという特徴をもったあり方を含意しているからである。笑いの時間的断絶とドゥルーズのノマド思考とのつながりを、国際学会である *Deleuze Studies Conference* (2014年6月開催、イスタンブール[トルコ])において発表した。このつながりを様々な文化文脈に応用し、さらに四つの発表を行った。日本と米国での発表は、ポストモダン芸術家アンディ・ウォルホールに関するもので、彼の作品におけるユーモアと笑いは、自己と文化伝統との連続性を絶えず断ち切っていく役割を果たしていることを論じた。他の二編の口頭発表は名古屋大学で

行ったが、時間による笑いの断絶は、アメリカ人作家ヘンリー・ジェイムズの小説や舞踏芸術家ローリィ・アンダーソンにおいて、そのテーマや構成と結びついていることを論じた。

以上のような研究成果を今後も発展させ、またここで生み出された理論や着想が他の研究者に採用されることを願っている。本研究者は、研究活動を続け、本課題にまつわる観念を2015年度から2017年度までの基盤研究(科研(C))を広めていきたい。そこでの主要な目的は、(1) ドゥルーズ哲学をさらに発展的に利用し、笑いを主観的時間の断絶として説明すること、(2) 欧米文脈を超えて、とりわけ日本や他のアジア諸国に見られる、笑いへの観点、なかでも笑いを生産し経験する際の時間の機能を明瞭化するような観点をさらに発展させることである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① WEEKS, Mark, Abandoning Our Selves to Laughter: Time and the Question of Self-loss in Laughter, *Israeli Journal of Humor Studies: an International Journal*, 査読有, Vol. 3, 2013, pp. 58-75, <http://www.israeli-humor-studies.org/Issue-No-3-June-2013.html>
- ② WEEKS, Mark, "Comic Theory and Perceptions of a Disappearing Self", *Studies in Language and Culture*, Vol. 34, 2012, No. 1, pp. 19-20

[学会発表] (計 7 件)

- ① WEEKS、Mark、“Playing across Time, Space and Bodies in Laurie Anderson’s ‘Mach 20’ ”、American Literature and Culture at the Crossroads of Race and Gender Symposium、名古屋大学、2015年3月24日
- ② WEEKS、Mark、“The Noisiest Silence: Reading the Laughable Text”、2nd International Conference on Narrative、名古屋大学、2014年12月10日
- ③ WEEKS、Mark、“Laughter as a Time Machine: A Nomadic Investigation”、53rd Annual Meeting of the Society for Phenomenology and Existential Philosophy、New Orleans、2014年10月25日
- ④ WEEKS、Mark、“Towards Nomad Thinking on Laughter’s Time Machinery”、7th Deleuze Studies Conference、Istanbul Technical University、Turkey、2014年7月16日
- ⑤ WEEKS、Mark、“Epistolary Prose, Epistemological Problems: James’s ‘A Bundle of Letters’ ”、1st International Conference on Narrative”、名古屋大学、2013年12月7日
- ⑥ WEEKS、Mark、“Andy Warhol and Comic Nomadic Culture”、International Society for Humor Studies 25th Annual Conference、Virginia、USA、2013年7月5日
- ⑦ WEEKS、Mark、“Bodies, Selves and the Temporal Collapse in Laughter”、First Global Conference on Time、Space and

the Body、Sydney、2013年2月11日

〔図書〕（計 1 件）

Loyola McLean、Lisa Stafford、Mark Weeks、*Exploring Bodies in Time and Space*、Inter-Disciplinary Press、2014、ISBN: 978-1-84888-246-1

〔その他〕

ホームページ

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~weeks/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ウィークス、マーク (Mark WEEKS)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：24520010